地域のつながりの中で広がる遊びの「輪」
保育所を核とした地域療育ネットワークづくり「たけのこ教室」30年の実践

竹内麗子　清水台保育園園長
鎌倉女子大学非常勤講師

1 ―― はじめに

みなさんこんにちは。福井県の清水台保育園から参りました竹内でございます。今回のシンポジウム「子どもを育む『わ』の心」に寄せる私のテーマとしましては、これまで、私達の保育園を核とした療育支援のネットワークづくりに取り組み、地域のつながりの中で「輪」を広げてまいりましたので、そのことを皆様にお話させていただければと思います。

私達の保育園は福井市の西の方、30分ほどで日本海に出るような所にあります。緑豊かな新興住宅地ということで自然環境と都会にはない地方の文化がまだあります。けれども、新興住宅地ですから、80%の方々が核家族であり、その現状を受け止めながら産後保育から幼児保育、それから障害児保育・早朝保育・日曜保育・延長保育と、様々なニーズに応じて保育を行っております。今年４月に入園された子どもさん30名のうち、26名が３歳未満児で乳児保育の充実も新たな課題となってまいりました。

また、その中に障害を持ったお子さんや対人関係や行動面、情緒面の発達の気がかりなお子さんもいらっしゃいます。私達はそのようなお子さんとの関わりから体験的に１歳以下の早期から支援していかなければいけないということを感じるようになり、保育者の方でも専門性をしっかりと学ぶ必要性について議論しているところです。

私が関わる施設としては、今、保育園が４カ所、それから児童館、児童クラブ数カ所、そして、学童期に入った障害児を支援する施設がございます。さらに、障害をもったお子さんが18歳以上に成長された後、社会的自立の道を歩むために利用できる施設「ライフカレッジ」、高齢の方々を対象としたケアハウス、ケア

ホーム等もあり、35年の歴史の中でそのような継続的な縦のつながりの支援の可能性も見えてくるようになってまいりました。

今日はそういった中で発展した横のつながりとして、地域に広がっていったネットワークの輪についてお話させていただきたいと思います。

2 ―― 如恵ちゃんの誕生とムーブメント教育との出逢い

今から30年ほど前のことです。昭和55（1980）年に生まれたある障害児の存在がきっかけとなり、私達の活動は始まりました。そのお子さん：如恵ちゃんは、生後３カ月目で重度の重複障害があることがわかりました。今は31歳になりましたが、彼女は、実は私の主人の妹の子どもでして、如恵ちゃんのお母さん（主人の妹）も保育園の園長をしておりまして、如恵ちゃんが障害児として誕生したという事実に、私達家族は驚きと不安でいっぱいでしたが、同時に、保育に関わってきた立場から何らかの希望を探し始めていたのかもしれません。私達はすぐに何が如恵さんの役に立つのか、少しでも回復する方法があるのかということについて、色々な情報を集め始めました。その中で、障害のある子ども達が社会の中で明るく強く生きていくための保育のあり方について考えるようになり、また、そのためには、親の心情を理解し支援していくことが重要だということに気づくようになりました。

昭和56（1981）年に、如恵ちゃんが玉ノ江保育園に入園することとなり、私達は福井市では初となる障害児と健常児が共に育ち合う保育をスタートさせました。しかし当時、如恵ちゃんの他にも、自閉症のお子さんや多動傾向やコミュニケーションに問題を抱えているお子さん、言葉の遅れのあるお子さん、難聴のお子さんがいらっしゃいました。

でも、30年前の実際というのは、そういうお子さんがいらっしゃってもなかなか理解することもできず、ただ受け入れていたという状況でした。特に如恵ちゃんの場合は、その障害の重さに驚くばかりで、保育の手立てもない試行錯誤の毎日でした。少しでも障害を理解して発達を援助していくために何か良い方法はないかということで、当時、ボイター法等色々な訓練法について学んだり、障害児保育を実践している県外の保育園や母子通園施設を見学に出かけたりしていました。その状況を、私達の保育園が所属する竹伸会の先代理事長である竹内武に報告しましたところ、理事長は、玉ノ江保育園で療育活動を行う為に母子教室を始めることを決断しました。

その夏に、日本保育協会主催の障害児保育研修会があると知り、私は東京まで出かけました。そこで、障害児の保健と安全の管理方法・障害児の早期発見早期療育について、横浜国立大学の小林芳文先生との出会いがありました。今日ここにいらっしゃる小林先生は、「障害児保育の中心課題は、子どもの健康と幸福感

の達成」であるということを話され、私達に大きな希望の光をくださいました。また、早期に障害を発見し関わりが早いほど成長を促すことができるという話や重度重複障害のお子さんに対しても、トランポリンやハンモックの揺れを利用して発達を支援する具体的な方法があるということを説明していただき、衝撃を受けました。「訓練ではなく感覚や運動遊びを通して、楽しみながら育てる」というムーブメント教育の方法論を知り、「これからの保育はこれだ」と、私達は小林先生にご指導いただくこととなりました。

3 —— たけのこ教室のあゆみ

医療機関での治療、訓練とは異なった、運動遊びの要素を軸に発達を援助するムーブメント教育法を取り入れ、専門家・保育園・親が連携を図り、障害児の療育の在り方を実現したいという私達の想いに、小林先生が賛同してくださり、昭和57（1982）年 4 月、心身障害児教育母子通園センター「たけのこ教室」を玉ノ江保育園の中に開設することになりました。障害があっても青竹のように強くたくましく生きてほしいという先代理事長の願いにより、教室は「たけのこ教室」と名づけられました。

第 1 回目のたけのこ教室は 5 月15日、小林先生に福井に来ていただいての開催でした。現在のたけのこムーブメント教室の始まりです。当時は如恵ちゃん一人を対象に始まったこの活動が30年継続し、月に 1 回の教室ですけれど、今では通ってこられたお子さんは、のべ1500〜1600人になると思います。当初、5 つの園でのスタートでしたが、現在では全17の施設がたけのこムーブメント教室と療育支援ネットワークを結び支え合っています。

開設時から現在まで、小林先生にはたけのこムーブメント教室のスーパーバイザーとして指導していただき、月 1 回・保育園に入園されている障害児を対象にムーブメント法による母子参加型教室を実践しています。

また、たけのこ教室を開催した翌年、昭和58（1983）年 7 月ムーブメント教育を学ぶ場として「第 1 回ムーブメント教育研修」が鹿苑保育園で開催されました。それ以来ムーブメント教育を保育・教育・療育に生かす実践講座や、取組みを紹介する教育研修会、夏期セミナー・パワーアップセミナーが毎年行われています。

昭和60（1985）年10月には地域社会における重度重複障害児早期指導の新しい試みが「NHK厚生事業団」の「第20回心身障害福祉賞」の優秀賞に、昭和61（1986）年 7 月にはこの受賞内容を紹介したNHKの明日の福祉シリーズ・「ゆきちゃんが笑った」が放送されました。また平成16（2004）年 4 月には、読売・光と愛の事業団より「第 1 回読売プルデンシャル福祉文化賞、奨励賞」を受賞、これまでの障害児の療育支援が高く評価されました。また、小林先生とたけのこ教室のスタッフによる本として、『動きを通して発達を育てるムーブメント教育の

実践１・２』[1] を、『いきいきムーブメント教育――保育・福祉の実践現場から』[2] を出版しました。

４―― たけのこ教室の活動内容

（1）たけのこ教室の活動目標

たけのこ教室の保育活動目標は、①感覚・運動機能の向上、②より豊かな情緒の形成、③自ら遊べる能力の育成、④コミュニケーション能力の支援、⑤人と関係を持ち、集団性を身につける、⑥ムーブメント教育・療法、プログラムアセスメントMEPAによる記録表の作成です。MEPAとは、Movement Education and Therapy Program Assessment の略で、運動スキルや身体意識、心理的諸機能、情緒・社会性機能の発達を把握し、ムーブメント教育・療法による支援の手がかりを得るためのアセスメントとして開発されたもので、2005年に改訂版のMEPA-Rが発行されました。

（2）活動事例紹介

実際の活動では、２つのグループに分かれて行っています。ある日の活動例を紹介しながら内容を説明します。

①アンパンマングループ：０歳児から５歳児までの障害乳児・重度重複障害児対象

１つめのグループは、アンパンマングループという愛称で呼ばれています。０歳児から５歳児までの障害乳児・重度重複障害児が対象で、トランポリンなどの揺れ遊具やビーンズバッグ・ふわふわマットなどを使ったムーブメントを行っています。動きの基本や感覚運動能力、身体意識、知覚能力、時間空間意識を育てることが目的です。たけのこムーブメント教室は、協力園の保育士がリーダーとなりプログラムを作成しています。また毎回小林先生にはスーパーバイザーとして保育士・親・子どもを支えてもらっています。まずは子供たちが環境に慣れるのにトランポリンやボールプールなど会場全体に遊具を用意して好きなムーブメントに参加してもらいます。トランポリンは感覚運動能力を育てる遊具の一つです。皆で叩いて揺らしたり音を出したりすることで手の力を育て、皆で集まることで社会性を養います。ほかに上下に飛ぶことにより前庭感覚機能を促すことができます。一人一人にあった姿勢や方向で揺れを経験し、動きが楽しくなるよう

1）小林芳文・「たけのこ教室」スタッフ（1985）『動きを通して発達を育てるムーブメント教育の実践１・2』、学研。

2）小林芳文・山崎麗子・竹内麗子（1995）『いきいきムーブメント教育――保育・福祉の実践現場から』、福村出版。

に音楽で盛り上げます。その後歌を歌って、お母さんとのふれあいを十分に楽しみます。ロープを使ってのムーブメントでは輪になってロープを握ったり送ったりすることで、手の操作性を養ったり皆で動きを共にする楽しみを知ることができます。集団ムーブメントではカエルのキャラクターが登場する等、季節感を味わいながら遊べるように環境を工夫します。子ども達が大好きなものを沢山吊るして登場したパラシュートの活動では、子どもが触ってみたい、関わりたいと思える雰囲気づくりや視覚的に楽しい環境をつくることで、子供から自然に手が伸びてくるといった動きを引き出すことになるのです。ファンタジックな雰囲気の中パラシュートの感覚を全身で味わいながら皆でよろこびの場が共有できるようにしています。最後にミーティングです。今日の経験を振り返り、できたこと、新しく気づいたこと等、喜びが次回につながる前向きな感想がたくさんありました。

②ドラえもんグループ：4 歳・5 歳の軽度障害児対象

2 つめのグループは、ドラえもんグループと呼ばれています。4 歳・5 歳の軽度障害児が対象です。このグループでは知覚連合能力・社会性・文字や数の概念を育て、創造性・表現力を高める事を目的としています。まずはフリームーブメントで子ども達に環境に慣れてもらいます。ドラえもんグループでは色や数・文字などがいろんな場面に出てきます。集団ムーブメントのはじまりは、ベンチを使ってのムーブメントです。音楽に合わせ指示された色を意識しながら親子一緒に動き、同じ色に集まったり友達と一緒に活動したりすることで、仲間意識を育て情緒の安定を図ります。更にベンチを使って色々な動きに挑戦します。ベンチに乗って「おみこしわっしょい」をやったり壁に立て掛けたベンチに昇ったりしました。ビーンズバッグと紙管を使ってのムーブメントでは紙管をつまんだり、紙管の上にビーンズバッグを乗せたりしながら、時間・空間意識を高めます。フープの色と同じ色のビーンズバッグを集め、その色のジャムを作ることになりました。赤い色のビーンズバッグはイチゴジャム、黄色はレモンジャムというふうに色から果物を連想し知覚連合能力を高めます。たくさんのビーンズバッグが入った大きな釣り堀ができました。ロープがついたフープ、長い紙管、ほうきをジグザグにしてビーンズバッグを捕まえます。なかなか思うようにつかむことができませんが、子ども達なりに色々工夫し、身体全体を使って頑張る姿を見ることができました。最後はパラシュートムーブメント。色とりどりの羽を使いファンタジックな世界を演出し、穏やかで楽しい雰囲気の中ムーブメント教室は終了しました。「頑張ったね会」では、楽しかったことや新しく発見したことを話し合い、記憶の再現を図ります。また、親同士の情報交換をしたり小林先生からのアドバイスをもらったりして、次の回へとつないでいきます。

5 ── 活動の発展と今後の課題

(1) 地域療育ネットワークの広がり

このように保育園を核とした地域療育ネットワークたけのこムーブメント教室の30年におよぶ実績は子ども・親・保護者のやさしい環境の中で育まれ、遊びの要素をふんだんに取り入れた楽しい育児支援を行っています。一方通行の訓練ではなく、子どもの尊厳を大切にし、遊びの要素をもった独自の教育システムは、共に考え共に学び共に愛しむものです。遊びを原点とするムーブメント教育・療法は子ども全体を包み込み、「身体:動くこと、あたま：考えること、こころ：感じること」の総合的な発達を目指しています。子どもたちが得意なところを発揮し、それを軸に好きな事や全体発達を支え、できるところをどんどんふくらますことで発達の良い循環をつくる。それこそが喜びを与える発達教育と考えています。子どもの最も身近にいるお母さんに家庭で出来る楽しい遊び、ムーブメントを知ってもらうことで喜びの中に発達の流れがあることを知っていただき、また子どもの動きたくなる環境、声を出したくなる環境、関わりたくなる環境を工夫し、これからも歩み続けたいと思います。生き生きと成長する子ども達の姿は、私たちを勇気づけてくれます。これらの福祉実践によって生まれたたけのこムーブメント教室・協力園の輪が今後さらに広がっていけばと願っています。

(2) 通常の保育への効果

活動の深まりの中で、保育者の意識が高まり日頃の保育へ影響するようになりました。たけのこ教室に関わった保育士達は、専門を超えたところで発達に関してしっかりと勉強していかなければいけないということに気づくようになりました。たとえば、たけのこ教室の活動目標に含まれる MEPA-R の活用ですが、この支援ツールを用いることで、私達は子ども一人一人の発達段階を具体的に把握することができ、子どものできることを応援していくことが可能となります。保育士は、MEPA-R による知見をもとに、運動面、言語、社会性の各分野で子ども達の発達段階を詳細に把握することができるようになり、さらに「ステップガイド」[3] と併用することで、チェックした子どもの発達を支援する具体的な方法として遊びの活動案を知ることができます。また、保育士の創造性や応用性も育まれており、それが保育の中での子ども達との関わりにも良い影響を生んでいるようです。遊具の使い方一つにしてもバリエーションが増え、子どものニーズに合った提示ができるようになってきます。こうして、私達は、これらの方法を障害児保育の場面のみならず、通常の保育の中で自然と活かすことができるようにな

3）小林芳文編（2006）『ムーブメント教育・療法による発達支援ステップガイド』、日本文化科学社。

り、個別支援に使ったり、年齢や発達を考慮した集団活動として提供したりするようになりました。その結果、子ども達はより意欲的に活動したり、明るい表情になったり、優しさや思いやりなど育っていることを私達は実感しています。

今後益々、ムーブメント教育による活動が障害児のお子さんのためだけではなく、健常のお子さんに向けても発展し、運動会や発表会等の行事や子育て支援の未就園児向けの支援の活動にも活かされていくよう希望しています。30年間続けたからこそ見えてきた子ども達の発達の連続性についても興味深いものがあり、乳児期・幼児期のみでなく、学童期・青年期・成人期・高齢期まで含んだライフステージを見据えた福祉や支援のあり方についてもあらためて考えるようになりました。

(3) 保護者・保育士・専門家の連携による深まり

たけのこ教室では、各保育園から参加した保育士達は、毎回、スーパーバイザーである小林芳文先生から直接研修を受け、ムーブメント教育・療法の理論と実践法をもとに保育士の専門性を高めています。日本ムーブメント教育・療法協会の認定資格取得にも挑戦し、さらに専門性を身につけることが保育士の共通理解となり、活動のレベルを上げることも解ってきました。協力園同士、保育士同士の学び合い育み合いのためのチームワークも生まれてきています。

また、保護者は、ムーブメント教育の理念に触れ、子どもの発達を肯定的にとらえることができるようになり、子育てを楽しむ力がついていきます。保育士と保護者の間でも、子育て・療育・保育の実際を学び合い、子どもの育ちを共有する活動が大事にされ、実践活動が財産として蓄積されていく中で、保育士・保護者のそれぞれの立場で自信や意欲を高めています。親子ムーブメント教室の実践がそれを支える17の保育園、そして参加する家庭の連携を深め、互いの力量と幸福感を高めています。私は今、本当に、関わってくださった皆様全てに感謝しながら、継続は力なりということを感じています。

［たけうち　れいこ］